



## Osaka Gakuin University Repository

Title	ジュトランド論争とハーパー・レコード The Jutland Controversy and the Harper Record
Author(s)	山口 悟 (YAMAGUCHI SATORU)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 27 巻第 1・2 号 : 77-105
Issue Date	2016.12.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

## ジュトランド論争とハーパー・レコード

山 口 悟

### The Jutland Controversy and the Harper Record

YAMAGUCHI SATORU

#### *ABSTRACT*

After the World War I, the Admiralty commenced to make the official record of the battle of Jutland of 1916. This mission was carried out by Captain J. E. T. Harper and his team of officers. The record, the so-called Harper Record, was completed in October 1919, but Admiral Beatty, the First Sea Lord and Chief of Naval Staff, sought many alterations to the record. Harper strongly resisted some alterations which he thought falsified the fact. This Harper's resistance resulted in the delay of completion of the record and blocking of its publication. The problem of the Harper Record was one of the triggers of the so-called Jutland controversy in the 1920s.

Harper had been instructed to make the record based solely on documentary evidence and without comment or criticism. However, Harper Record could not help showing a kind of Harper's evaluation of development of the battle of Jutland. Harper placed higher value on the action of the Jellicoe's battle fleet than Beatty. Beatty placed higher value on the action of his battlecruiser fleet than Harper. The dispute about Harper Record between Harper and Beatty was essentially caused by the difference between their images of the battle of Jutland. That difference and also Harper's strong will which was not daunted by Beatty's authority resulted in the blocking of the Harper Record.

## はじめに

第一次世界大戦最大の海戦である1916年のジウトランド海戦において、イギリス海軍はドイツ主力艦隊の撃滅に失敗した。その責任の所在をめぐって大戦後に展開されたのが、いわゆるジウトランド論争である。この論争の発生と激化に大きく影響したのが、海軍省により作成の進められた最初のジウトランド海戦公式記録、いわゆるハーパー・レコード（Harper Record）であった。

この公式記録作成作業はハーパー（John Ernest Troyte Harper）大佐を長とするグループが担い<sup>1)</sup>、1919年に「ジウトランド海戦公式記録1916年5月30日～6月1日（Official Record of the Battle of Jutland, 30th May to 1st June 1916）」、つまりはハーパー・レコード（Harper Record）の原案が作成された。しかし、このハーパー・レコードは以後の修正作業が難航して公表が見送られ、このことが、いわゆるジウトランド論争の激化する一要因となった。そして論争の展開するなか、ハーパー・レコードは最終的に1927年に「ジウトランド海戦記録複製（Reproduction of the Record of the Battle of Jutland）」として公表されることになる<sup>2)</sup>。それは海軍省によるジウトランド海戦公式記録である「ジウトランド海戦報告（Narrative of the Battle of Jutland）」が1924年に公表された後のことであった。

ハーパー・レコードの作成と公表が紆余曲折した直接的要因は、当時の軍令部長ビーティー（David Richard Beatty）がその内容に強く反発したことにある。ジウトランド海戦において、主力艦隊である大艦隊（Grand Fleet）の先鋒として巡洋戦艦隊を率いた彼にとって、ハーパー・レコー

- 1) フルーウェン（Oswald Moreton Frewen）少佐など4人の将校がハーパーを補助した。フルーウェンは、親ビーティーの傾向が強いウィンストン・チャーチル（Winston Leonard Spencer-Churchill）の親戚であるが、親ジェリコーの傾向の強い人物であった。
- 2) *Reproduction of the Record of the Battle of Jutland, Command Paper 2870, 1927* (hereafter cited as *Reproduction of the Record*). これは、1920年5月時点でのハーパー・レコード原案の再版である。Stephen Wentworth Roskill, *Admiral of the Fleet Earl Beatty: the Last Naval Hero: An Intimate Biography* (London: Collins, 1980) (hereafter cited as *Earl Beatty*), p.328.

ドの内容はジュトランド海戦の真実を歪めて伝えるものと感じられたのである<sup>3)</sup>。

本稿は、ハーパー・レコードにまつわる問題点を検討することで、ジュトランド論争上のハーパー・レコードの位置づけを考え、複雑な様相をもつジュトランド論争の理解を深めたいとするものである。作業にあたっては、ジェリコー文書にあるハーパー・レコード史料を中心に<sup>4)</sup>、ハーパーの個人文書<sup>5)</sup>、ビーティーの個人文書集<sup>6)</sup>、海軍省のジュトランド海戦公式

- 3) ビーティーとジュトランド論争の関係については、拙稿「ジュトランド論争とビーティー」(『軍事史学』第50巻 第3・4合併号、2015年3月発行)を参照。
- 4) 本稿では、大英図書館に保管されているジェリコー文書第31 (Jellicoe Papers. vol.XXXI : Add MS 49019) である「ジュトランド海戦公式記録1916年5月30日～6月1日補遺および図表付属 (Official Record of the Battle of Jutland 30th. May to 1st. June, 1916 with Appendices & Plans.) (hereafter cited as Official Record)」をハーパー・レコードの基本テキストとして利用とする。これは、そこに記された修正指示部分により、1927年公表の「ジュトランド海戦公式記録複製」に先立つ版であるとわかる。ジェリコーが入手したハーパー・レコードの最初の版だろうか。cf. Jellicoe to Lieut-Commander Oswald Frewen, 12 Feb. 1920, A. T. Patterson, ed., *The Jellicoe Papers; Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Earl Jellicoe of Scapa*, vol.2 (London: Navy Records Society, 1968) (hereafter cited as *JP*), p.406.
- 5) John Ernest Troyte Harper, *Facts Dealing with the Compilation of the Official Record of the Battle of Jutland and the Reason It Was not Published* (hereafter cited as *Facts Dealing*), 1928, *JP*, vol.2, pp.461-490.  
 ハーパーは、ハーパー・レコード作成にまつわる体験とそれについての見解を上記文書 *Facts Dealing* に書き残した。これは長い間、王立防衛安全保障研究所 (RUSI: Royal United Services Institute) に保管されていたが、海軍記録協会 (The Navy Records Society) によって1968年に出版の『ジェリコー文書集 (*JP*)』第2巻に収録され、公開された。ビーティーによるジュトランド海戦公式記録作成作業への介入を述べたこの文書の公開に対し、第2代ビーティー伯 (David Field Beatty) は強く反対した。Barry Gough, *Historical Dreadnoughts: Arthur Marder, Stephen Roskill and Battles of Naval History* (Bamsley: Seaforth, 2010), pp.260-269. この文書がハーパーの個人的視点からのみ記されたことには留意すべきだが、ハーパー・レコードを考える上で不可欠の史料であり、本稿でも全面的に参考としている。cf. Geoffrey Bennett, "The Harper Papers: Fresh Light on the Jutland Controversy," *Quarterly Review* (Jan. 1965), pp.16-25.
- 6) B. Ranft, ed., *The Beatty Papers: Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Earl Beatty*, vol.2 (Aldershot: Scolar Press, 1993) (hereafter cited as *BP*).

記録である「ジウトランド海戦報告」<sup>7)</sup>などを利用して、考察を進めていきたい。

## 1. ハーパー・レコードの成立

第一次世界大戦終結後、大戦中に大艦隊司令長官と軍令部長を歴任したジェリコー（John Rushworth Jellicoe）は、大戦回顧録である『大艦隊 1914～1916年：その成立、発展と任務（*The Grand Fleet, 1914-1916: Its Creation, Development and Work*）』を執筆する。このジェリコーの著作がジウトランド海戦にまつわる論争を引き起こすことを懸念した軍令部長ウィームズ（Rosslyn Erskine Wemyss）は、海軍省によるジウトランド海戦の公式記録作成の必要を感じ、1919年2月に、その作業をハーパー大佐に命じた<sup>8)</sup>。

ハーパーには、航海日誌などの関連する各種文書資料のみに基づいて、関係者の口証を採用せずに、また批評はさしはさまずにジウトランド海戦の時系列的記録を作成するよう指示がなされた<sup>9)</sup>。彼は、機雷敷設艦オークリーを用いてジウトランド海戦での巡洋戦艦インヴィンシブルの戦没地点を求め、それを基点に海戦参加各艦の相対位置を定めるなどして作成作業を進め、10月2日に公式記録を完成させた。しかし、ウィームズが休暇中のため対応したブロック（Osmond de Beauvoir Brock）軍令部次長は、翌月にビーティーが軍令部長に就任することにかんがみ、この公式記録の承認を延期し、ビーティーの就任を待つことにした。そして、新軍令部長ビーティーは、その記録内容各所に修正を求めたのである。

ハーパーによれば、ビーティーの求める修正は、個々には小さなものであっても、総合すれば公式記録の正確性を歪めるものであり、また削除要求個所はほとんど戦艦隊の行動に関するものであったという<sup>10)</sup>。ハーパー

7) *Narrative of the Battle of Jutland* (H.M.S.O., 1924) (hereafter cited as *Narrative*).

8) Alfred Temple Patterson, *Jellicoe: A Biography* (London: Macmillan, 1969), p.230.

9) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, p.464. 以後、ハーパー・レコードの作成過程についての記述は、このハーパーの個人文書に基づいている。

10) *Ibid.*, p.465.

は自らが事実と信じるものに反する修正には反対し、それでも修正せねばならないのなら口頭ではなく明確な書面での命令がほしいと主張した。再度の要求の末、彼は、翌1920年2月11日にビーティーの署名入りの命令書を受け取った。

しかし、ここに海相ロング（Walter Hume Long）が介入して、事態は逆転する。このころ出版されたベレアーズ（Carlyon Wilfroy Bellairs）の著作『ジュトランド：種蒔きと刈り取り（*The Battle of Jutland; The Sowing and the Reaping*）』において、幕僚経験の不足するハーパーはジュトランド海戦の公式記録作成者として不適格だと示唆されていた<sup>11)</sup>。これにハーパーは大いに憤慨して訴訟まで考えたが、ロングはハーパーと面談して、それを思いとどまらせた。このことをきっかけに、ロングはハーパーからジュトランド海戦公式記録の作成作業がビーティーの修正要求ゆえに遅延していることを知るようになった。ハーパーによれば、ロングは、ビーティーが公式記録を読むべきではなかったと述べ、彼の命令のみによって修正が為されるべきではないとビーティーへの憂慮を示した<sup>12)</sup>。ロングは、特にこの問題がジェリコーの不利益につながることを懸念していたという。ロングは、ハーパーに対し、これからもその問題について専門の見地から情報を提供するように指示する一方、ビーティーによる公式記録の修正を阻止する意思を明らかにし、実際、ビーティーの修正命令は3月11日に取り消されるようになった。

こうして、ビーティーの修正要求を排して、公式記録の作成作業は5月に最終段階に入ったものの、再び以前と同様なビーティーの修正要求がハーパーに提示された<sup>13)</sup>。これに対してハーパーも再び反論を呈し、公式

11) ハーパーは、ベレアーズにはハーパーによる公式記録に批判的となるよう世論を誘導する目的があったのではないかとしている。ベレアーズは親ビーティーの姿勢が明らかな人物であり、この彼の著作の巻頭にはビーティーが一文を寄せているが、ハーパーは、ベレアーズの著述にビーティーによる資料面での便宜供与があったと考えている。Carlyon Wilfroy Bellairs, *The Battle of Jutland; The Sowing and the Reaping* (London: Hodder and Stoughton, 1920), pp.v, xi-xii; Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, pp.462, 466.

12) *Ibid.*, pp.466-467.

13) Notes by 1st Sea Lord on the Harper Record, 15 May 1920, *BP*, vol.2, pp.443-444.

記録の完成は頓挫することになる<sup>14)</sup>。

作業の進展が見られないなかで海相ロングは、公式記録問題を海軍省首脳部の検討に付し、そこで出された見解についてハーバーにも見解を求め、最終的には海相も加わって海軍省首脳部が協議をおこない、公式記録案についての合意を目指すことに決定した<sup>15)</sup>。この検討過程のなかで、軍令部長補（Assistant Chief of the Naval Staff）のチャトフィールド（Alfred Ernle Montacute Chatfield）大佐は、イギリス側資料のみに基づいてイギリス側損害のみ詳細に示されることからイギリス側が敗色濃厚だったとの誤った印象を与えるものとして公式記録案を批判した<sup>16)</sup>。また同じく軍令部次長のブロック中將も、主力戦艦隊同士の決戦があつてイギリスが敗れたとの誤った印象を与えるものだと批判を表した<sup>17)</sup>。

海軍省首脳部による検討の結果、イギリス側資料への偏重から生じるかもしれない誤った印象を避けるべく、公式記録に前文を付すこととされた<sup>18)</sup>。次節で採りあげるが、この前文案は、ジェリコーの反発を呼ぶことになった。ジェリコーは公式記録問題の紛糾に気づいていたが、当初は完成するまで公式記録を読むべきではないとの立場をとっていた<sup>19)</sup>。しかし、再度の求めに応じて公式記録とその修正案に接した彼は、原版の印象

14) Memorandum: Harper to Naval Secretary, for 1st Lord, 27 May 1920, *BP*, vol.2, pp.446-447.

15) Naval Secretary to 1st Lord, 29 May 1920, *BP*, vol.2, p.448.

16) Remarks Made by ACNS on Official Record of the Battle of Jutland, 2 June 1920, *BP*, vol.2, pp.448-449. ジェットランド海戦当時、チャトフィールドはビーティーの旗艦である巡洋戦艦ライオンの艦長であった。

17) Remarks Made by DCNS on Official Record of the Battle of Jutland, 14 June 1920, *BP*, vol.2, pp.449-450. ジェットランド海戦当時、ブロックは第1巡洋戦艦戦隊司令官として巡洋戦艦プリンセス・ロイヤルにあった。

18) ハーバーも前文案を提示したが、最終的に採用された前文案は、ビーティーとチャトフィールドによるもののものである。Harper, *Facts Dealing*, *JP*, vol.2, p.469; Roskill, *Earl Beatty*, p.328.

19) Jellicoe to Lieut-Commander Oswald Frewen, 12 Feb. 1920, *JP*, vol.2, p.406; Harper, *Facts Dealing*, *JP*, vol.2, pp.467-468. ジェリコーとジェットランド論争との関係については、拙稿「ジェットランド論争とジェリコー」（『国際学論集』第25巻1・2号、2014年12月）参照。

を歪めるような修正をすべきではないと主張し、特に前文案については、戦艦隊が海戦の展開に寄与するところがなかったとの印象を与えるものであると驚きを表明した<sup>20)</sup>。

7月14日に海軍省において、ジェリコーからの批判や海戦時の巡洋戦艦隊と戦艦隊の相対位置について議論がおこなわれたが、ビーティーとハーパーの見解の相違は解消されなかった<sup>21)</sup>。ハーパーは、海戦時の航路図について検討する委員会の設置を望んだが、それは実現せず、以後もビーティーやチャトフィールドらとの議論がつづけられた。巡洋戦艦隊の360度旋回の実在が否定され難いとの認識が海軍委員に共有されるなど一時はハーパーにとって状況の好転が感じられるときもあったものの<sup>22)</sup>、やはり巡洋戦艦隊の航路図などをめぐってビーティーとの対立は止まず、修正に抵抗するハーパーを任務から解任し、別の公式記録を作成することが海相に示唆されるまでに至った<sup>23)</sup>。しかしながら結局、海軍省首脳はハーパーに航路図等の修正を求めつづけることに決し、一方で、公式記録の前文の作成を高名な海軍史家であるコーベット（Julian Stafford Corbett）に依頼することになった<sup>24)</sup>。

しかし、帝国防衛委員会による公刊戦史の海軍部分である『海軍作戦（Naval Operations）』を執筆中であったコーベットは、出版社（Longmans）が他の公刊戦史に関わるのを嫌うだろうとして、前文作成の依頼を断った<sup>25)</sup>。ただし、コーベットは、『海軍作戦』のジュトランド海戦部分の出版に先立ってハーパー・レコードが公表される悪影響を懸念すると同時に、自らの執筆資料としてハーパー・レコードを利用したいとも思っており、

20) Harper, Facts Dealing, and Jellicoe to Long, 5 July 1920, *JP*, vol.2, p.470 and pp.406-410.

21) その会合について海軍省には記録がなく、おそらく非公式な会合だったかと思われる。Roskill, *Earl Beatty*, p.329.

22) Harper, Facts Dealing, *JP*, vol.2, p.472.

23) *Ibid.*, p.473.

24) Extract from Boards Minutes, 6 Aug. 1920, *BP*, vol.2, pp.450-451.

25) ハーパー・レコードとコーベットの関係については下記を参照。Donald M. Schurman, *Julian S. Corbett 1854-1922: Historian of British Maritime Policy from Drake to Jellicoe* (London: Royal Historical Society, 1981), pp.188-190.



その意を汲んだ出版社の運動により、コーベットの希望はいずれも実現することになった。

このコーベットの動きは、ハーバー・レコード問題に苦しんでいた海軍省にとっても、ハーバー・レコードの公表中止を可能とする名分として利用された。海軍省による公式記録の公表断念の意向は9月22日に口頭でハーバーに伝えられ、10月下旬には議会でもその旨が明らかにされた<sup>26)</sup>。

かくして海軍省による公式記録としてのハーバー・レコードの作成は終わったが、その後も議会においてジウトランド海戦公式記録を求める動きはつづき、それに応えるかたちで、海戦に関わる報告書や航路図、信号記録などを集成したもの、つまり『ジウトランド海戦1916年5月30日～6月1日：付録付公式文書集（*Battle of Jutland 30th May to 1st June 1916: Official Despatches with Appendices*）』（Cmd. 1068）が1920年12月17日に議会に公表された<sup>27)</sup>。

未公表となったハーバー・レコードはコーベットに渡され、彼の手になる大戦公刊戦史『海軍作戦（*Naval Operations*）』第3巻作成の資料となった。それは、1922年のコーベット急死の翌年に出版されたが、その内容に海軍省は批判的であった<sup>28)</sup>。コーベットは、ジウトランド海戦におけるジェリコーの艦隊指揮に理解を示していた。一方、ビーティーは、ハーバー・レコードに替わる海軍省のジウトランド海戦公式記録を作成すべく、デュワー兄弟（Kenneth Gilbert Balmain Dewar, Alfred Charles Dewar）

26) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, pp.475, 476. ビーティーは、コーベットに公式記録資料を渡す一方で、関係する報告書と信号記録、修正された航路図のみ海軍省が公表するという妥協案を主張した。Roskill, *Earl Beatty*, pp.330-331.

27) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, p.478. ハーバーは1920年11月初旬に、もし将来ハーバー・レコードが公表された際、『ジウトランド海戦1916年5月30日～6月1日：付録付公式文書集』に収録の資料と比較対照された場合に両者の矛盾が明らかとなるだろうことを懸念して、一部の航路図と対応する本文部分はハーバー作成のものではないと公式記録の序文に明示するよう海軍省に要求している。Ibid., pp.479-481.

28) J. S. Corbett, *Naval Operations*, vol.3 (London: Longmans, Green, 1923). コーベットの『海軍作戦』第3巻をめぐる問題については下記を参照。Schurman, *Corbett*, pp.189-194.

にその作業を命じ、1921年に「海軍幕僚評価（Naval Staff Appreciation）」が完成した<sup>29)</sup>。しかし、それは内容があまりにジェリコーに対して批判的であり、海軍部内でもごく一部の配布にとどめおかねばならないものだった。ために「海軍幕僚評価」をもとに、外部に公開可能な穏当な内容の公式記録がつけられることになり、「ジウトランド海戦報告（*Narrative of the Battle of Jutland*）」が作成された。1922年に原案が作成され、ジェリコーからの強い批判に抗して、それは1924年6月に公表された。イギリス海軍のジウトランド海戦公式記録の完成であった。

しかし、ジウトランド論争は1920年代に展開をつづけ、そのなかでピーターの軍令部長退任を控えた1927年に、ハーパー・レコードはついに公表されることになった<sup>30)</sup>。それは、「そこになんらかの秘密や人騒がせな証拠もしくは批判があるという憶測を一掃するため」にも公表されたのであった<sup>31)</sup>。ハーパー・レコードは、最初から最後までジウトランド論争の展開に深く関与していたのである。

## 2. ハーパー・レコードにおける論争点

ジウトランド論争におけるハーパー・レコードの位置づけを探るために、まずはごく簡単にジウトランド海戦の展開について概観したうえで、ハーパー・レコード作成上の問題点を検討する。さらに、ジウトランド論争での主要な論点がハーパー・レコードにおいて、どのように扱われているかについても検討したい。

29) 「海軍幕僚評価」については下記を参照。Andrew Gordon, *The Rules of the Game: Jutland and British Naval Command* (1996; London: John Murray, 2005), pp.545-546; Roskill, *Earl Beatty*, pp.332-334. cf., K. G. B. Dewar, "Battle of Jutland," I-III, *The Naval Review*, 47-4, 48-1, 2 (Oct. 1959, Jan. and Apr. 1960).

30) *Reproduction of the Record*. これは海軍省の有していた、最も修正が少ない版であり、1920年5月の校正刷である。Roskill, *Earl Beatty*, p.328.

31) *Explanatory Note by the Admiralty, Reproduction of the Record*, p.iii.

## A. ジュトランド海戦の展開概要

ジュトランド海戦は、1916年5月31日から翌6月1日にかけて、イギリス主力艦隊である大艦隊とドイツ海軍の主力艦隊である大海艦隊（Hochseeflotte）との間にノルウェー沖で生じた第一次世界大戦最大の海戦である<sup>32)</sup>。ドイツ海軍は、イギリス海軍戦力の一部を誘引し撃滅しようと企図して5月30日に出撃した。この動きを察知したイギリス海軍は、詳細は不明ながら迎撃すべく大艦隊を出撃させた。

[第1段階] 5月31日の午後2時20分以降、まずは両軍先鋒の巡洋戦艦隊同士が接敵し、ビーティー率いるイギリス巡洋戦艦隊がヒッパー（Franz Ritter von Hipper）中將率いるドイツ巡洋戦艦隊を追撃する。ドイツ側は自軍主力の戦艦隊へのイギリス巡洋戦艦隊の誘引を意図しての後退であった。このとき、臨時にビーティーの指揮下に入っていたエヴァン・トーマス（Hugh Evan-Thomas）少將率いる第5戦艦戦隊の転針が遅れ、その戦闘参加も遅れることになった。イギリス側は追撃戦のなかで、巡洋戦艦インディファティガブルとクイーン・メリーを失う大損害を受ける。

[第2段階] イギリス巡洋戦艦隊は、シェーア（Reinhard Scheer）中將率いる敵主力の戦艦隊と遭遇して反転し、味方主力のジェリコー率いる戦艦隊に誘引すべく後退。ドイツ大海艦隊はイギリス巡洋戦艦隊を追撃する。このときも第5戦艦戦隊は転針が遅れ、ために敵艦隊の激しい攻撃にさらされることになった。

[第3段階] 大艦隊主力の戦艦隊が到着して攻撃を開始し、ドイツ大海艦隊は後退をはかる。イギリスの巡洋戦艦インヴィンシブルが爆沈。

[第4段階] 夜に入り大規模交戦はなくなるが、大艦隊は翌朝の再交戦を期して大海艦隊を追撃する。主に水雷戦隊による夜戦が散発的に生じる

---

32) ジュトランド海戦の展開については下記を参照。Gordon, *The Rules of the Game*; Arthur Jacob Marder, *From the Dreadnought to Scapa Flow*, vol.3: *Jutland and After, May to December 1916*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 1978) (hereafter cited as *FDSF*).

も、結局、大海艦隊は大艦隊をかわして離脱に成功する。

結局、イギリス海軍は、念願のドイツ主力艦隊撃滅の好機を取り逃がした。この海戦でのイギリス側の損害は巡洋戦艦3隻を含む各種14隻、戦死6,094名など。ドイツ側の損害は巡洋戦艦1隻を含む各種10隻、戦死2,551名であった。

## B. ハーパー・レコード作成上の論争点

ハーパー・レコードの作成が難航したのは、ジュトランド海戦の事実認識について、記録編集者のハーパーと軍令部長ビーティーらの見解に差異があり、最終的にそれが解消されなかったためである。ハーパーは、ビーティーの修正要求のすべてには従わず、その強い抵抗によってハーパー・レコードの公表は断念された。1924年に海軍省が公表したジュトランド海戦の公式記録「ジュトランド海戦報告」は、ビーティーが承認したものである。彼が承認した「ジュトランド海戦報告」と、彼の否認したハーパー・レコードの内容の差異も視角として、ハーパー・レコード作成上の論争点をみてみたい。

### (1) 巡洋戦艦隊の360度旋回

ビーティーの修正要求において特にハーパーが問題視したのは、ジュトランド海戦中の5月31日午後6時52分ごろに巡洋戦艦隊がなした360度旋回（32 point turn）の問題である。巡洋戦艦隊を直率していたビーティー自身の署名付きのものも含む関係文書資料は360度旋回がなされたことを示しており、さらに彼のもとの海戦に参加した部下たちのなかでもそれを認める者があった<sup>33)</sup>。しかし、360度旋回をビーティーは頑強に否認し、そ

33) Captain J. E. T. Harper to ACNS, 20 Dec. 1919, and K. Creighton to Captain J. E. T. Harper, 12 Nov. 1919, *BP*, vol.2, pp.433-437 and p.431; Harper, *Facts Dealing*, *JP*, vol.2, p.472.

この件についてのみ、ハーパーはジュトランド海戦で巡洋戦艦隊にあったブロックとチャトフィールドからの口証を得る許可を求めたが、許されなかった。Ibid., vol.2, p.465.

の記録の修正を求めたのである<sup>34)</sup>。

当初、ハーパー・レコードでは、「右舷への逐次回頭をおこなって一周回した (a turn was made in succession to starboard through a complete circle)」との記述がなされていたが、それは削除されて、「ライオンのジャイロコンパスの故障により、海軍省の有する資料は矛盾しており、およそこの時間の巡洋戦艦隊の正確な航路図は確認したい」との記述が挿入された<sup>35)</sup>。付録図にも、午後6時53分から7時2分にかけて逆S字のかたちをつくって航行する巡洋戦艦ライオンの航路図が描かれ、「午後6時50分から7時10分の間のイギリス巡洋戦艦隊の正確な航路について、海軍省の記録資料は矛盾している」との註が付されている<sup>36)</sup>。一方、「ジユトランド海戦報告」では、午後6時54分以降に巡洋戦艦隊が南西微南へと転進したと記され、図28「午後6時56分のおよその位置」では半円形に近いかたちの針路変更が示されている<sup>37)</sup>。

ビーティーは、ハーパーに対し、360度旋回ではなく、右舷180度転針に続く左舷180度転針という逆S字状の航路をとったと主張しているが<sup>38)</sup>、ハーパーはこの見解に強く批判的で、360度旋回が事実だと確信していた<sup>39)</sup>。ビーティーが360度旋回を強く否認した理由は不明だが、それが消極的姿勢を示す行動と思われかねないと考えたのかもしれない<sup>40)</sup>。

34) Commander Ralph Seymour to Captain J. E. Harper, 18 Dec. and Minute by Beatty, 22 Dec. 1919, *BP*, vol.2, pp.432 and 437.

35) Official Record, Add MS 49019, p.53. cf. Reproduction of the Record, p.65.

参照の Official Record には頁番号が付されているが、タイプされた元来の番号には斜線が引かれ、修正後の新たな番号が手書きされている。本稿では、修正前のタイプされた頁番号を用いている。

36) Diagram 10: Plan of Action between Main Fleets 6 p.m. to 8 p.m. 31<sup>st</sup>. May 1916, Add MS 49023; Harper: Minute to ACNS, 20 Feb. 1920, and Harper: Minute to ACNS, 12 Mar. 1920, *BP*, vol.2, pp.438 and 442.

37) *Narrative*, p.54; Diagram 28: Approximate Positions at 6.56 p.m., *Narrative*.

38) Commander Ralph Seymour to Captain J. E. Harper, 18 Dec. and Minute by Beatty, 22 Dec. 1919, *BP*, vol.2, pp.432, 437.

39) Harper, Facts Dealing, *JP*, vol.2, pp.465-466; J. E. T. Harper, *The Truth about Jutland* (London: John Murray, 1927), pp.98-100.

40) Marder, *FDSF*, vol.3, pp.148-150; Roskill, *Earl Beatty*, p.176.

## (2) 戦艦隊の貢献

ビーティーはジュトランド海戦における戦艦隊の貢献を過小評価する傾向を有していた。ハーパーによれば、1919年12月18日、ビーティーの修正要求を伝達する際、彼の腹心のシーモア（Ralph Frederick Seymour）中佐は、「できるだけ、我々は戦艦隊が行動していた事実を知らしめたくない」と述べたという<sup>41)</sup>。

ハーパー・レコードの前文案も、そのような傾向を有しており、それにハーパーは批判的であった。その内容は、段落ごとに簡単に述べると概ね以下のようなものである<sup>42)</sup>。

- 1) 敵巡洋戦艦隊は敵主力の戦艦隊によって増援されていたため、大艦隊主力の戦艦隊が到着するまでの数時間、イギリス巡洋戦艦隊は戦力的に大いに劣勢であった。
- 2) 大艦隊主力の戦艦隊の接近を知ったドイツ大海艦隊は、戦闘を避けて母港への撤退を図った。
- 3) イギリス艦隊の戦没艦隻数はドイツ側より多いが、砲撃命中率はドイツ側にほぼ倍するほど優越していた。
- 4) 6月1日には、敵巡洋戦艦隊は、イギリス巡洋戦艦隊との戦闘の結果、さらなる戦闘に耐えられる状態ではない一方、イギリス艦隊の能力は深刻には損なわれていなかった。
- 5) 英独の損傷艦の修理完了までの日数の比較は、ドイツ艦隊がより深い打撃を受けていたことを示している。
- 6) この海戦の結果、1916年8月の短期間の出撃をのぞき、ドイツ主力艦隊は1918年11月の降伏まで自国海域に封じ込められることになった。

この前文案についてハーパーは大いに批判的で、第1、2、6段落は資

41) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, p.465. シーモアは、1920年2月に公式記録の前文試案を提示しているが、それは戦艦隊の行動を低く、巡洋戦艦隊の行動を高く評価するものであった。Seymour to Beatty, 20 Feb. 1920, *BP*, vol.2, pp.439-441.

42) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, p.469.

料的裏付けのない記述、つまり事実ではなく、また第4段落の内容は、「イギリス巡洋戦艦隊との戦闘の結果」ゆえにもたらされたものではない、としている<sup>43)</sup>。この見解はジェリコーの前文批判と同様のものであり、ハーパーとジェリコーの近い関係がここからもうかがえる<sup>44)</sup>。

公式記録にある戦艦隊の戦艦ハーキュリーズに関する記述も論争点となった。ピーティーは、ハーキュリーズが午後6時15分に敵砲撃に夾叉（straddled）され、艦上が大いに海水で水浸しになったとの記述を削除するよう主張したのである<sup>45)</sup>。そのような細かい記述は無用のものだし、敵資料によればハーキュリーズは敵から見えなかったのに、公式記録に艦名を記すなどおかしいというのである<sup>46)</sup>。ハーパーは、この記述は敵艦隊に接近中の戦艦隊が戦闘隊形へと展開するとき敵の射程内にあったことを示す唯一の資料であるとして反論したが<sup>47)</sup>、ピーティーは敵艦隊の砲撃を戦艦隊は受けていないと主張した。結局、水浸しになったとする部分の削除に落ちついたが、ジェリコーも、削除部分は一般人に戦闘の様相を伝えるのに有用であるとして削除に反対意見を表しており、ハーパーによれば、そのジェリコーの意見を海相ロングが支持したところ、ピーティーは、「まあ、考えてみれば、戦艦隊の誰かが水をかぶったことを世間が知ってもよいわけだ。それがジウトランド海戦と彼らの関わりのすべてなのだから」と、皮肉な態度をとったという<sup>48)</sup>。結局、一度は削除を指示されたものの、このハーキュリーズをめぐる記述は生き残ることになっ

43) Ibid., pp.469-70.

44) Jellicoe to Long, 5 July 1920, *JP*, vol.2, pp.407-410.

ハーパーとジェリコーの間では、手紙など通信の交換があった。Add MS 49028. 1920年当時の交流の程度は不明だが、公式記録修正問題に対しハーパーとジェリコーが同様の立場にあったことがうかがえる。さらにハーパーのもとで公式記録作成作業を補佐したフルウェン少佐がジェリコーと親しい関係にあったことも、ジウトランド海戦公式記録作成問題におけるハーパーとジェリコーの関係を考える上で想起されるべきだろう。

45) Harper, *Facts Dealing*, *JP*, vol.2, pp.470-471.

46) Notes by 1st Sea Lord on the Harper Record, 15 May 1920, *BP*, vol.2, pp.443-444.

47) Memorandum: Harper to Naval Secretary, for 1st Lord, 27 May 1920, *BP*, vol.2, p.447.

48) Harper, *Facts Dealing*, *JP*, vol.2, p.471.

た<sup>49)</sup>。「ジュトランド海戦報告」においては、「2、3の敵斉射が中央部および後方の戦艦戦隊の周囲に降りかかった」との簡潔な叙述がなされるのみであり、その部分には「戦艦アイアン・デューク、ハーキュリーズとリヴェンジである」との註が付されている<sup>50)</sup>。

もとよりビーティーは、戦艦隊はせいぜい間欠的に交戦したのみであり、艦隊決戦（general fleet action）をおこなったとは認めていなかった<sup>51)</sup>。これは公式記録上の表現にも反映されており、ハーパー・レコードでの「艦隊決戦」（General Fleet Action）の章は、「ジュトランド海戦報告」では、「最初の半時間」と「二度目の交戦（Engagement）」という二つの章に分けられている<sup>52)</sup>。内容的にも、ハーパー・レコードの方が戦艦隊の砲撃をより詳細に扱っており、戦艦隊各艦の砲撃開始時間とその標的、そして各敵艦との距離も記されている<sup>53)</sup>。一方、「ジュトランド海戦報告」では、「戦闘隊形への展開後の戦艦隊は、ただ時折（only occasionally）戦闘できただけである」とし、戦艦隊の戦闘については比較的簡潔な記述ですませている<sup>54)</sup>。

### (3) 艦隊の航路図と相対位置

ジュトランド海戦における巡洋戦艦隊の相対位置や航路図も、ハーパー・レコード作成上の大きな論争点であり、最後まで克服されずに、そ

49) Official Record原稿では、該当部分上に横線が引かれて削除対象とされていたが、復活（stet）になっている。Official Record, Add MS 49019, pp.32-33.

50) *Narrative*, p.44.

51) Notes by 1st Sea Lord on the Harper Record, 15 May 1920, *BP*, vol.2, pp.443-444.

ビーティーからハーパーへの連絡役を務めていたシーモア中佐が提案したジュトランド海戦公式記録の前文案では、英独主力戦艦隊による艦隊決戦はなかったと記されている。この前文案の実現はなかったが、このことから、ジュトランド海戦において戦艦隊が果たした役割に対するビーティーらの認識は理解できよう。Seymour to Beatty, 20 Feb. 1920, *BP*, vol.2, p.440.

52) General Fleet Action, Official Record, Add MS 49019; chap. VI: 'The first half hour, 6.15 p.m. to 6.40 p.m.' and VII: 'The Second Engagement and Admiral Scheer's turn away', *Narrative*.

53) Official Record, Add MS 49019, pp.32-40.

54) *Narrative*, pp.47-58.



の公表中止へとつながった。ハーパーは、1920年11月に、一部の航路図とそれに対応する本文部分について責任は有さないと公式記録の序文に明記してほしいとまで要求しているが、具体的には、1916年5月31日午後5時から6時までのドイツ巡洋戦艦隊の動きと、同じく午後6時50分から7時50分までのイギリス艦隊の一部の動きについての記述に対する責任を否認している<sup>55)</sup>。

ハーパーの考えでは、ビーティーはより敵と近い位置に巡洋戦艦隊を置こうとする傾向を有し<sup>56)</sup>、そのような修正要求の受入れが航路図の矛盾につながったのであるが、文書資料に基づいて妥当と思われるハーパー作成の航路図を誤りとして、自説を押し通そうとするのだった<sup>57)</sup>。ビーティーの修正要求すべてを受け入れることができないハーパーは、最後まで修正

55) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, pp.479-480. 以下の付図とそれに対応する本文部分である。(ドイツ巡洋戦艦隊の航路図関係) Diagram 2: General Plan of the Day Action, 31st May 1916, Showing Track of Each Squadron Engaged, 8: Battle Cruiser Action, Third Phase, 5.00 p.m. to 6.00 p.m. 31st May 1916, Including Junction with Battle Fleet. (イギリス艦隊の航路図関係) Diagram 2, 10: Plan of Action between Main Fleets, 6.00 p.m. to 8.00 p.m. 31st May 1916, 12: Approximate Position of Ships at 7.15 p.m. 31st May 1916, 13: Approximate Position of Ships at 7.25 p.m. 31st May 1916.

1927年の *Reproduction of the Record* の公表においては、費用のこともあって航路図は複製・公表されていない。本稿では大英図書館所蔵のジェリコー文書第35 (Jellicoe Papers. vol.XXXV. : Add MS 49023) の付図を参照しているが、付表2の名称のみ *Battle of Jutland 31st May 1916* とされて *Reproduction of the Record* のものとは名称に相違がある。

56) たとえばハーパーによれば、ビーティーの修正指示に従うと1916年5月31日午後7時15分当時の巡洋戦艦隊の対敵距離は、資料的に妥当と思われる当初の1万7千ヤードから1万3千4百ヤードに短縮されることになり、これは他の部隊の航路図全体の修正を要するものだった。Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, p.473.

なおハーパー・レコードでは、午後7時14分時点で、1万5千ヤードの距離で砲撃を再開したとの記述がある。Official Record, p.54, Add MS 49019; Diagram 12: Approximate positions of ships at 7.15 p.m. on 31st May, 1916. Destroyer flotillas are not shown, with exception of German half flotillas attacking, Add MS 49023. 「ジュトランド海戦報告」においても、特に距離の記載はないものの図29をみると、およそ1万5千ヤード強の対敵距離となっている。Diagram 29: Approximate Positions at 7.12 p.m. and Tracks to 7.20 p.m. *Narrative*.

57) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, pp.471-473, 475.

に抵抗をつけ、ハーパー・レコードの公表中止へと至ることになる<sup>58)</sup>。

#### (4) 巡洋戦艦隊の戦闘

ハーパー・レコードでは、巡洋戦艦隊の戦闘を扱った部分に、司令長官ジェリコーの報告文の一部を引用している。「巡洋戦艦隊の戦闘の困惑させる特徴は、ドイツ巡洋戦艦5隻が、最初の20分の後には遠距離ではあるもののクイーン・エリザベス級戦艦4隻の砲撃支援を得ていた同種のイギリス艦6隻と交戦して、さらにクイーン・メリーとインディファティガブルを撃沈した事実である。敵がのちに大打撃をこうむり、その一艦のリュッツオウが破壊されたことは真実だが、しかし、そうであっても、結果は不快 (unpalatable) というより他ないものである」<sup>59)</sup>。この後にイギリス巡洋戦艦の損失の要因とドイツ巡洋戦艦隊の砲撃精度の高さが述べられる部分が続くが、以上の部分はすべて削除指示が出されている。ビーティーにとり、巡洋戦艦隊の行動を批判する趣があると感じられての指示であったのだろう。この部分が後に復活することはなかった。ハーパーもこの部分が批評的であると感じ、削除やむなしと考えたのかもしれない<sup>60)</sup>。

### C. ジュトランド論争における問題点とハーパー・レコード

以下においては、ジュトランド論争における主要な論争点がハーパー・レコードにおいてどのように扱われているかについて確認してみたい。

58) 1916年5月31日午後7時15分当時の巡洋戦艦隊の相対位置をめぐる議論に関し、ハーパーは、それを検討する独立委員会が設置され、そこでの検討のなかで、利用可能な文書資料にかんがみて彼の作成した航路図が誤りであるとされるのなら、休職 (half-pay: 半給あつかい) する覚悟があるとまで述べている。Ibid., p.471.

59) Official Record, p.20, Add MS 49019. このジェリコーの報告文全体は下記を参照。Battle of Jutland, 30th May to 1st June, 1916. Official dispatches with appendices, HMSO, 1920, p.125.

60) Roskill, *Earl Beatty*, pp.326, 328.

### (1) 「南方への追撃」段階における第5戦艦戦隊の回頭の遅れ

ジウトランド海戦の第1段階である「南方への追撃」において、巡洋戦艦隊は巡洋戦艦2隻を失う大損害を被り、大いに苦戦した。これは巡洋戦艦隊と、それへ臨時に付属していたエヴァン・トーマス少将指揮する第5戦艦戦隊との間に距離があって有効な連携ができなかったこと、つまりは戦力集中の失敗が大きな要因であった。具体的には、英独両軍が31日午後2時20分頃に接触後、ピーティーが発した転針命令がうまく第5戦艦戦隊に伝達されず、巡洋戦艦隊に第5戦艦戦隊が遅れをとったためであった。

これをハーパー・レコードでは、午後2時32分に巡洋戦艦隊が南南東(方位角144度)へ転針したのに遅れて2時40分に第5戦艦戦隊が同じく転針したため、両者間の距離は広がり、「巡洋戦艦隊は第5戦艦戦隊のかなり前で転針し、しばらくその視界外となった」、と述べられている<sup>61)</sup>。一方、「ジウトランド海戦報告」では、「ライオンが転針した時、バーラムは、おそらくジグザグ運動を再開しようとして、北微西へと左2点転針した。6分後にライオンの転針信号を受けたとき、バーラムは15点南南東へと後方旋回した。この転針が終わったとき、バーラムは9マイル以上ライオンから離れた距離にあった。そして次の一時間に、合流コースを進むことによって、この距離のいくらかを取り返せたが、およそ午後3時50分に戦闘が始まったとき、バーラムはいまだ割り当て位置の相当後方にあった」とされている<sup>62)</sup>。

これらハーパー・レコードと「ジウトランド海戦記録」の記述を比較した場合、どちらも第5戦艦戦隊の遅れの原因を指摘することはない。しかし、上記の「ジウトランド海戦報告」に見える「戦闘が始まったとき、バーラムはいまだ割り当て位置の相当後方にあった」との記述は、第5戦艦戦隊の遅れを強調する響きがあると感じられよう。このような第5戦艦

61) Official Record, Add MS 49019, pp.14, 21; Battle of Jutland May 31st 1916, Battle Cruiser Action First Phase. 2 p.m. to 3.40 p.m. May 31st 1916, Add MS 49023.

62) *Narrative*, p.12. 戦艦バーラムは第5戦艦戦隊の旗艦であった。「ジウトランド海戦報告」の図5では、バーラムの転針時間は午後2時38分とされている。Diagram 5: Galatea & 1st L. C. S. Closing Enemy - 2.30 P.M., *Narrative*.

戦隊に転針の遅れを帰する姿勢には、ジェリコーとエヴァン・トーマスからの批判を招くことになる<sup>63)</sup>。

## (2) 「北方への後退」段階における第5戦艦戦隊の回頭の遅れ

ドイツ巡洋戦艦隊を追撃して大海艦隊と遭遇した後、イギリス巡洋戦艦隊は大海艦隊をイギリス大艦隊主力の戦艦隊に誘引しようとして回頭したが、このときにも第5戦艦戦隊は転針が遅れ、ために大海艦隊の追撃のもと危険な状況に陥ることになった。

ハーパー・レコードでは、午後4時38分に敵戦艦隊を確認した巡洋戦艦隊は反転したが、「午後4時53分に、第5戦艦戦隊は逆方向へと過ぎ行き、そして、16点回頭との信号命令が彼らになされた。これは、巡洋戦艦隊と離れるとすぐに実行された」。また、「午後4時50分にライオンは、北方に進みつつ、右舷16点逐次回頭との第5戦艦戦隊への旗旒信号を掲げて、第5戦艦戦隊に接近した。この回頭は、巡洋戦艦隊が過ぎ去った後、午後4時56分になされ、第5戦艦戦隊は巡洋戦艦隊の後に続いて支援するために、さらに少し右舷方向に変針した」とされている<sup>64)</sup>。

一方、「ジウトランド海戦報告」では、以下のように述べられている。午後4時33分に敵戦艦発見との第一報が到来し、さらに38分にその詳細な情報を得たイギリス巡洋戦艦隊は、40分に発令された16点右舷回頭の信号命令を実行した。「いまだ南方へ針路をとっていた第5戦艦戦隊は、いまや急速にビーティー提督の巡洋戦艦隊に接近していた。戦闘が開始された時、それはライオンの左舷艦尾方向7海里にあった。……午後4時40分の敵駆逐艦の攻撃時に、エヴァン・トーマス少将は、2点変針との信号命令をなし、それは4時46分頃にはっきり実行された。その時までにはライオンは北方への針路を全速力で戻っていた。ライオンは、16点逐次回頭をなせとの第5戦艦戦隊への旗旒信号を掲げつつ、すぐにバーラムの左舷艦首方

63) 「ジウトランド海戦報告」にまつわるジェリコーとエヴァン・トーマスの反発については下記を参照。拙稿「ジウトランド論争とジェリコー」、19～22頁。「ジウトランド論争とビーティー」、203頁。

64) Official Record, Add MS 49019, pp.16, 22.

向に至った。ライオンはおよそ左手1海里半向こうを4時53分ごろ過ぎさり、その後すぐ第5戦艦戦隊は右舷へと回頭した。……北方への針路にのるにつれて、バーラムもまた、南南東の方角にドイツ戦艦隊を見ることになった。その転針は遅れ、ライオンはいまやその右舷艦首方向およそ3、4海里向こうにあった<sup>65)</sup>。ビーティー「中将が転針するよう信号した4時50分から、第5戦艦戦隊が1、2海里の間そのままの針路を維持したことが想起されよう。このことが第5戦艦戦隊を戦艦ケーニツヒとドイツ戦艦隊の先頭部隊の激しい砲撃下におくことになった<sup>66)</sup>。

この「北方への後退」段階における記述では、ハーパー・レコードよりも「ジウトランド海戦報告」の方が、より強く第5戦艦戦隊の遅れを批判的にとらえる響きを有すると感じられよう。

### (3) 情報伝達の適否

ジウトランド海戦においては、大艦隊司令長官ジェリコーへの適切な情報提供がなされず、それがドイツ大海艦隊撃滅の好機を逸する一因になったとされている。ハーパー・レコードにおいても、暗号取扱いにまつわる、通信士の誤り、あるいは報告送信艦と受信艦の推測航法上の位置情報の避けがたい齟齬から、敵艦隊の相対位置は推測上のものにならざるをえなかったと述べられている<sup>67)</sup>。これに対してビーティーは、司令長官ジェリコーへの情報提供が不十分で、情報伝達に多くの誤りがあったと理解されるような記述は事実ではなく、不公平で不当なものだと反論し、それら記述が批評にあたるとして該当部分（Reports on the Progress of the Action）の削除を示唆している<sup>68)</sup>。このビーティーの批判に対してハーパーも記述の妥当性を主張して反論しているが、「不運な（unfortunate）」

65) *Narrative*, p.24.

66) *Ibid.*, p.27.

67) *Official Record*, Add MS 49019, p.28.

68) *Notes by 1st Sea Lord on the Harper Record*, 15 May 1920, *BP*, vol.2, p.443.

ビーティーが削除を示唆している部分は、以前にも彼が変更指示をしたものの、海相ロングの介入によって復活した部分だった。Memorandum: Harper to Naval Secretary, for 1st Lord, 27 May 1920, *BP*, vol.2, p.445.

という語の使用が問題とされるなど、ビーティーがこの問題に神経質だったことがうかがえる<sup>69)</sup>。

「ジュトランド海戦報告」においても、いろいろな情報伝達にまつわる困難や障害は述べられており、ハーパー・レコードにおける認識の程度との比較は難しいが、なんらかの艦艇や部署などに原因を帰するような表現は見られず、軍令部長ビーティーの許容できる表現であることは間違いないだろう<sup>70)</sup>。この「ジュトランド海戦報告」における情報面の説明は、少なくとも司令長官だったジェリコーにとって十分かつ正確なものとは思われず、彼からの批判を招いている<sup>71)</sup>。

#### (4) 戦艦隊の左翼先行展開の適否

ジュトランド海戦での大艦隊司令長官ジェリコーの指揮のうち、特に問題になったのが大海艦隊と接敵前に大艦隊主力の戦艦隊が採用した左翼先行のかたちの戦闘隊形への移行である。戦艦4隻から成る縦隊が横に6列並ぶかたちの航行隊形から単縦陣の戦闘隊形に移行するにあたり、右手に位置する敵艦隊に対し、最左翼の戦艦を先頭として、敵艦隊から距離を置く時計回りのかたちで展開したのである。これに対し、反時計回りでの、右翼を先行させるかたちで展開すれば、より敵艦隊と接近することができ、より早く、より長く戦闘ができるという利点があったのだが、敵と近いがゆえに展開途中の不利な状態で敵艦隊と交戦せねばならない危険があったため、ジェリコーは左翼先行展開を採用したのだ<sup>72)</sup>。しかし、この選択は、大戦後のジュトランド論争において、大きな論争点となる。

ハーパー・レコードにおいて、この左翼先行展開については、それに至るジェリコーの考えが報告文引用のかたちで添えられて、展開の推移が時

69) Notes by 1st Sea Lord on the Harper Record, 15 May and Memorandum: Harper to Naval Secretary, for 1st Lord, 27 May 1920, *BP*, vol.2, pp.443, 445-446. 記録文中での実際の語形は、unfortunatelyである。

70) e.g. *Narrative*, pp.32-33. cf. Official Record, Add MS 49019, p.28.

71) *Narrative*, pp.108-11.

72) 戦艦隊の展開の問題については、拙稿「ジュトランド論争とジェリコー」、9～13頁参照。

系列的に述べられている<sup>73)</sup>。「ジュトランド海戦報告」では、展開直前の状況とジェリコーの選択について説明が付されている<sup>74)</sup>。単純に文面からは、どちらとも左翼先行展開について批判的であるとは感じられない。

#### (5) 魚雷退避の適否

ジェリコーの指揮においても一つ大きな論争点となったのが、敵艦隊を追撃するなかで、午後7時20分台に敵の雷撃に対し、2回にわたって敵から遠ざかるかたちでの変針（turn away）をなしたことである。ジュトランド論争の中で、この慎重な艦隊運動が敵との交戦の機会を逸することにつながったとの批判が生じた<sup>75)</sup>。

ハーバー・レコードは、時系列的に事実を述べているが、この魚雷退避に関して、その有効性を述べる第4戦艦戦隊の戦艦隊司令官の報告文と、それが既定の戦術であるとするジェリコーの報告文を引用している<sup>76)</sup>。また、後者の報告文では、水雷兵器の影響下に撤退する敵艦隊に決戦を強要して撃滅することの困難も述べられており、評価する文言はないにしても、ジェリコーの指揮への理解を感じとれるものであるといえよう<sup>77)</sup>。ただし、復活はしたものの、一時、第4戦艦戦隊司令官の報告文引用部分は削除が指示されており、これは魚雷退避について弁護する必要はないとの判断が背景にあったのかもしれない。

「ジュトランド海戦報告」においては、敵雷撃時の様相を記述しつつ

73) Official Record, Add MS 49019, pp.31-33.

74) *Narrative*, pp.42-43.

75) 魚雷退避の問題については、拙稿「ジュトランド論争とジェリコー」、13～15頁参照。

76) Official Record, Add MS 49019, pp.40-41.

前者は第4戦艦戦隊第3戦艦隊司令官のダフ（Alexander Ludovic Duff）少将による1916年6月4日付の報告書からの抜粋である。Rear Admiral's Report, the 4th Battle Squadron, 4 June 1916, Battle of Jutland, 30th May to 1st June, 1916. Official dispatches with appendices, HMSO, 1920, p.125. しかし、ダフはジュトランド海戦で艦隊全体が魚雷退避したことに批判的であった。Marder, *FDSF*, vol.3, p.133.

77) ハーバーは後の著作『ジュトランド海戦の真実（The Truth about Jutland）』において、水雷兵器の危険性を強く述べ、ジェリコーの魚雷退避を支持している。Harper, *The Truth about Jutland*, pp.172-177.

も、2度の魚雷退避について解釈することはない<sup>78)</sup>。しかし、その雷撃にまつわる展開を叙述するにあたり、ドイツ水雷戦隊が実質的に打撃を与えられなかったとしつつも、「この会敵において決定的役割を演じた」とも記している<sup>79)</sup>。この叙述をもってジェリコーの退避を問題視している姿勢の表れとみるのは敏感にすぎるだろうか。

### 3. ハーパーとジウトランド論争

第一次世界大戦最大の海戦であるジウトランド海戦は、大海艦隊撃滅という決定的勝利をもたらしうる好機であった。しかし、大海艦隊撃滅はならず、その結果にイギリス社会は落胆した。それゆえにこそ、そのジウトランド海戦の公式記録であるハーパー・レコードには議会や社会の注目が集まり、その公表の遅延と中止はジウトランド海戦記録にまつわる疑惑の存在を社会に感じさせて、さらなる論争をもたらす背景をつくりだした<sup>80)</sup>。ハーパー・レコードはジウトランド論争の激化に大きく影響したのである。

ジウトランド海戦公式記録作成作業の難航と公表中止のあと、軍令部長ビーティーのもとで海軍省は、ハーパー・レコードにかわる公式記録の作成作業をおこなって1924年の「ジウトランド海戦報告」の公表に至ることになるが、それはジェリコーの批判を招き、ジウトランド論争を終息させることはなかった。「ジウトランド海戦報告」以後も、ベーコン（Reginald Hugh Spencer Bacon）やチャーチル（Winston Leonard Spencer-Churchill）などがジウトランド海戦を論じて、ジウトランド論争の激化をもたらした<sup>81)</sup>。ジウトランド海戦での大損害を思えば、ハーパーが述べるごとく、ハーパー・レコードが公表されていたなら以後のジウトランド論争は生じ

78) *Narrative*, pp.57-59.

79) *Ibid.*, p.57.

80) Daily Mail Leading Article 'The Jutland Hush-Up,' 28 Oct. 1920, *BP*, vol.2, pp.452-453.

81) Reginald Hugh Spencer Bacon, *The Jutland Scandal*, rev. ed. (1925; London: Hutchinson, 1933); Winston Leonard Spencer-Churchill, *The World Crisis*, vol.3, pt.1 (London: Butterworth, 1927).



なかった、とまではいえないだろう<sup>82)</sup>。しかし、海軍省が公式記録作成問題をめぐりジウトランド論争の発生源となることもなく、その問題へのビーティーとジェリコーの介入もなく、史実ほど激しいジウトランド論争の展開はみられなかったと思われる。

ハーパー・レコードの公表の遅延と中止はビーティーの介入が主要因であるが、彼の圧力に屈せずに頑強に修正要求に抵抗したハーパー自身の影響も大きいと判じられよう。ハーパーがビーティーの要求をそのまま受け入れて修正をおこなっていれば、その修正版が1920年に海軍省公式記録として公表されていた可能性は大きいであろう。のちに海軍省公式記録として「ジウトランド海戦報告」が公表できたのであるから、ビーティーの納得できる内容の公式記録作成が不可能であったとは思えない。ビーティーの意に沿う内容となった公式記録は、「ジウトランド海戦報告」の場合と同じくジェリコーの反発を喚起したであろうし、ジウトランド論争を終わらせたわけではないだろうが、少なくとも海軍省の公式記録作成作業を終わらせ、海軍省とジウトランド論争との関わりを打ち切ったとは思われる。

ハーパーにかけられたビーティーの修正圧力は非常に大きなものであり、ハーパーは一時期、精神衰弱に陥ったといわれる<sup>83)</sup>。それでもハーパーはビーティーに迎合する安楽な選択をなさず、先述の巡洋戦艦隊の航路図変更を求める圧力に抗したときのように、まさに職を賭してまで抵抗した<sup>84)</sup>。彼をそこまで強い抵抗に導いたものは、公式記録作成者として社会に名を公表されていることから、公式記録に誤りがあれば、その責任を自らが負わねばならないという認識であった。それを自覚すればこそ、彼は事実と反すると思われる修正要求に対して強く反対し、従わねばならないとなれば明確な修正命令を、さらには自らの解任まで求め、どうしても公表される場合には自らが作成したものではないとの但書を付すように求めたのである<sup>85)</sup>。

---

82) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, pp.464-465.

83) Lieutenant Cdr O. Frewen to Evan-Thomas, 22 Feb. 1927, *BP*, vol.2, p.476.

84) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, p.471.

85) *Ibid.*, pp.465-466, 473, 475-476, 479-480.

公式記録作成作業が難航するなか、ハーパーはジェリコーが不当に批判されていると感じ、彼に同情していたが、このこともハーパーのビーティーへの抵抗を強めたといえるだろう<sup>86)</sup>。このような感情は、ハーパーがニュージーランド出身であったがゆえに、ジェリコーのニュージーランド総督就任によっても強化されたかもしれない<sup>87)</sup>。しかし、ハーパーにかぎらず、海相ロングやコーベットが有するジェリコーへの同情や理解を示す姿勢は、自らの修正要求に反対する勢力の強さをビーティーに感じさせ、さらに彼をしてハーパーへの修正圧力を強化させることになったのかもしれない<sup>88)</sup>。

ジュトランド海戦での巡洋戦艦隊の行動の無謬を信じているといってもよいビーティーにとり、ハーパー・レコードにおいて巡洋戦艦隊の行動に至らぬ点があったと思われる表現があることは許せなかった。彼にとってジュトランド海戦での巡洋戦艦隊は、360度旋回などおこなわず、敵と近い位置にあって勇戦し、司令長官ジェリコーへも適切な通信連絡をおこない、第5戦艦隊の回頭の遅れの責任も有していなかったのであった。またビーティーにとって、ジュトランド海戦における戦艦隊の貢献度の低さも明らかであり、「艦隊決戦」の語句の使用を認めない姿勢にもうかがえるように、彼の認識以上に戦艦隊が海戦へ貢献していたとの評価は誤りなのであった。ハーパー・レコードへの彼の修正指示からは、ビーティーが公式記録の内容に非常に敏感だったことがうかがえる。

ハーパー・レコード作成上の基本的条件は批評を含まないというものであり、ハーパー・レコードは同じ公式記録である後の「ジュトランド海戦報告」の記述と比較しても事実展開を淡々と記した時系列的記録の色合いが明らかで、批評を排するという指示によく従って作成されているようにみえる<sup>89)</sup>。しかし、完全に批評的部分を排しているか否かを判断すること

86) Ibid., pp.462, 463.

87) Gordon, *The Rules of the Game*, pp.541-542.

88) Roskill, *Earl Beatty*, pp.327-328, 331-332.

89) 「ジュトランド海戦報告」では、ハーパー・レコードよりも物語的な描写がみられる。たとえば戦艦隊の戦闘参加のころの巡洋戦艦隊の描写は、「巡洋戦艦隊は、速度と力のとてつもない光景を呈しつつ、戦いの傷跡も明らかにしていた。ライオン

は難しい。たとえば、情報伝達の適否についての部分のように、ハーパーには批評を排した中立的記述と思われても、ビーティーにとっては巡洋戦艦隊の非をならす気味のある偏った記述に感じられたのである。また、引用資料の選択によっても、ある傾きをもった心証が記録の読者に形成される。ジェリコーの魚雷退避に関しての引用資料がそのような例であろう。巡洋戦艦隊の戦闘に関する司令長官の報告文からの引用部分については、批評的であるとビーティーは感じ、その部分がのちに復活しなかったことから、指摘されたハーパーもそう認めたのではないかと想像される。さらに、艦隊決戦か単なる交戦なのか、報告書中の章題の付け方にも、ジウトランド海戦についての個人の認識のあり様が投影されているといえる。

ビーティーは、ジウトランド海戦についての虚偽を公式記録に押し込もうとしたわけではなく、ハーパーのジウトランド海戦に対する認識のあり様をハーパー・レコードの文面から感じとり、それを偏りと認識して、彼なりに正しいと信じるものへ是正すべく修正指示をおこなったのである。ハーパー・レコードは、戦闘中の不完全な記録を総合して作りだされた、もっとも妥当と思われる海戦像にしかすぎず、誤りは当然にありえた<sup>90)</sup>。ビーティーにとっては、たとえ資料に基づいていたとしてもハーパー・レコードの記述が実際に海戦に参加した者たちの事実認識よりも正しいとは思えなかったのである<sup>91)</sup>。資料に基づいて妥当と考えられるジウトランド海戦像を有するハーパーと、その海戦に実際に参加して、それゆえにこそ真実だと確信するジウトランド海戦像を体得していたビーティーとの間には、ジウトランド海戦に対する認識に大きな差異があったのである。

その差異の代表的なものの一つが、ジェリコー率いる戦艦隊の海戦への貢献についての認識であった。たとえば、戦艦ハーキュリーズが夾叉され

---

の一砲塔に備わる艦砲はほんやりと非戦闘側を見つめ、その側面にあいた砲弾孔からは長くたなびく煙を吹きだしていた」、というものである。*Narrative*, p.44.

90) Beatty to Shane Leslie, [1922], *BP*, vol.2, p.453.

91) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, p.475.

たとの記述を、ハーパーはジュトランド海戦の描写に必要と考えたのに対し、ビーティーは無用かつ事実を歪めるものと考えた。そして、戦艦隊の交戦をハーパーは艦隊決戦（general fleet action）と表現したのに対し、ビーティーは、「ジュトランド海戦報告」での章題に見られるごとく、せいぜい断続的な交戦（engagement）だったと認識し、艦隊決戦があったというすでに「粉碎された幻想（shattered illusion）」を公式記録が示してはならないと感じていた<sup>92)</sup>。彼がハーパー・レコードにある戦艦隊の砲撃開始時刻、標的、対敵距離の一覧を無用と主張するのも、彼にとって戦艦隊の役割を詳述することは無益かつ不要であるからであった。その姿勢はジュトランド海戦への異なった認識を有するハーパーと、そしてジェリコーとの衝突をまねいた。

ビーティーの望む公式記録の修正と前文案についてジェリコーは、戦艦隊が海戦で役立たずであったとの印象を与えるものであると反対しており<sup>93)</sup>、それはハーパーも同意見であった。ハーパーは、正確かつ素早い砲撃で敵艦隊を速やかに混乱状態に陥れ、大打撃を与えたのは戦艦隊であり、巡洋戦艦隊はジェリコーに適切な情報提供をなさず、巡洋戦艦隊同士の戦闘でもほとんど敵に打撃を与えられなかったと考えていた<sup>94)</sup>。このことは、「論評もしくは批判はまったく禁じられ、なにも公式記録には挿し込まれなかったが、事実そのままの公表が注意深い学徒に明らかにしたであろう」ことだった<sup>95)</sup>。つまりは、たとえ直接的論評がなかったとしても、戦艦隊と巡洋戦艦隊の果たした役割についての真実、つまりはハーパーの認識は、ハーパー・レコードの文面からうかがうことができるということになろう。そうであるならば、異なるジュトランド海戦像を有していたビーティーがハーパー・レコードの内容各所に反発し、元巡洋戦艦隊幹部でいまや海軍省首脳となっていたブロックやチャトフィールドも前述のごとくハーパー・レコードにイギリス勝利の雰囲気欠けているとして

92) Notes by 1st Sea Lord on the Harper Record, 15 May 1920, *BP*, vol.2, pp.443-444.

93) Jellicoe to Long, 5 July 1920, *JP*, vol.2, pp.406-410.

94) Harper, Facts Dealing, *JP*, vol.2, pp.470, 474.

95) *Ibid.*, p.474.

批判的であったことも理解できよう。

ジュトランド海戦に対する認識自体が異なるハーパーとビーティーとの間に、その海戦の公式記録案をめぐる対立が生じたのは自然なことであったといえよう。そしてハーパーが上官たる軍令部長に対して強く抵抗をつづける信念を有していたことで、ハーパー・レコードの速やかな公表は不可能となったのである。

### おわりに

ハーパーは公式記録の作成者として、その誤りの責任を負わされることを深く懸念した。そしてビーティーは、ジュトランド海戦公式記録に記録される立場から、不当に記録されることを懸念した。ハーパー・レコードの作成過程には、歴史を記録する者と記録される者の対立がみられたといえよう。

ハーパーは1921年11月に海軍省を離れたのち、1922年から1924年まで戦艦レゾリュションの艦長を務め、1924年には少将へと昇進した。しかし、海軍工廠での任務につくことにもなう現役延長の見込みがあったものの、結局はそれがかなわずに、1927年に退役することになった<sup>96)</sup>。その背後にビーティーの意思が働いているとハーパーは感じており、それが彼にビーティーに対する反発をさらに強めさせただろうことは想像に難くない<sup>97)</sup>。

退役後、ハーパーは『ジュトランド海戦の真実』を出版し、ビーティーへの批判とジェリコーの弁護を展開した。これと時を同じくして1927年に、海軍省はハーパー・レコードを公表する。それに付された海軍省の解説文には、先述のごとく、「そこになんらかの秘密や人騒がせな証拠もし

---

96) 退役後であるが、1929年にハーパーは中将に昇進している。

97) Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, p.483.

ハーパーの海軍工廠への任命を阻止したのは、第三海軍卿兼監督官（Third Sea Lord and Controller of the Navy）だったチャトフィールドであった。Roskill, *Earl Beatty*, p.325.

---

くは批判があるという憶測を一掃する」ことも公表の目的の一つであると記されていた<sup>98)</sup>。

この文章からもわかるように、ハーパー・レコードは公表を見送られたことで、その内容以上にジュトランド論争の激化を促した。隠されたことで、なおさらの影響力を発揮しようとは、ビーティーもハーパーも想像しなかったにちがいない。

---

98) *Reproduction of the Record*, p.iii.